

全日本ミドルボート選手権参戦記

～初戦総合 19 位（ブービー）からのクラス 3 位～

SUPER WAVE VI 河村

SUPER WAVE VI（以下、S.W.）にとり、エリカカップと並ぶシーズン前半のターゲットの全日本ミドルボート選手権（以下、全日本ミドル）は、東海開催かつ大会会長を長坂代表オーナーが務める事もあり、昨年の和歌山マリーナシティに続く参戦となった。

全日本ミドルは海の日含む 3 日間、午前は風で風待ち、昼からのシーブリーズで 5～6 kt 以上になればレース実施となるケースが多く、微風を得手としない S.W.にとり、上位進出が期待し難い真夏のレースである。

今回も初戦第 1 レースは後半風が落ち、レース終了後、一旦ハーバーバック。夕方風が吹き出し回答旗降下、16 時過ぎ第 2 レーススタート。2 日目のディスタンスは、午前の風待ちを経てノーレース。最終 3 日目の 14 時迄のインショア 4 レースを残すのみとなった。

参加艇は 20 艇。東海から参加 5 艇の他、関東・関西・九州水域の何れも百戦錬磨の強豪揃い。S.W.は 20 艇中最小レーティングで C クラス。コリンシアン（アマチュア）は、S.W.を含め 6 艇。

レースプランは、S.W.の最小レーティング、特に A クラスの K36-SAMURAI の 3 艇との圧倒的ボートスピード差等を考慮し、滑りに集中する事に徹した。

1 上回航順位でほぼレースの大勢が決まる為、スタート直後になるべく殺されない事、後は①スピード重視、②フレッシュウインド確保、③早目の回航準備。

ラインはほぼイーブンだが、他艇にスピードで置いて行かれるので、下寄りからルームを保ってスタートし、振れに合わせたコース取りで基本的には左海面展開の戦略だったが、そこは強豪艇揃い、なかなか思うようにはさせてくれない。

大型艇有利の展開は止むなしとし、着順には固執せずとも、食い下がる事を目標に最後まで諦めずに走り切る。

第 1 レース：最終 4 レグで風が落ち、先行艇に置いて行かれ、タイムリミットがよぎる総合 19 位の最悪の出だし。

第 2 レース：夕方の安定した順風下よく走り、9 位。但し、修正 5 位とは 23 秒差。

最終 3 日目は、S.W.が得意とする 10kt 超の風が予想外にコンスタントに続く。

第 3 レース：13 位。修正 10 位とは 12 秒差。

第 4 レース：更に風が上がり、ゼネリコ 2 回後、スタート。13 位。修正 9 位と 4 秒差。

第 5 レース：12 位。修正 8 位と 20 秒差。



午前の順風かつ猛暑の3レースで頭も身体もバテバテとなる中、13時15分に第6レーススタート（本日4レース目）。

他艇のスピンやマーク回航トラブルが散見される中、よく走り、7位。修正4位と18秒差。

初戦第1レース総合19位の出遅れ、スタート直後の厳しい競り合い、振れに合わせたコース選択とマーク回航含むほぼノーミスのクルーワークで、最後まで諦めずに走り切り、レースを重ねる毎に結果を残す事の出来た充実の大会でした。

一方、各レースの修正時間差（僅か数秒差に数艇）からすると、結果論・タラレバですが、未だ未だ順位を上げる余地はあったと思います。

最終日4レース、トータルで6レース実施した事が、S.W.にとっては、初戦第1レースのCutと第6レース順位の参入により、クラス3位という幸運・快挙に結び付きました。

最後に、今大会の新たな試み？の「クルー制限」の「30歳以下1名以上又は1名以上が女性」に関しては、今後のヨットレース最後に、今大会の新たな試み？の「クルー制限」の「30歳以下1名以上又は1名以上が女性」に関しては、今後のヨットレース界の持続性等を考慮すると待ったなし、必要な事で、今後も続けて頂きたいと思います。

